

## 『歴史における個人の役割』 第一回

藤田智久

### 1. 古典をどう読むか

- ・現代との距離がある。歴史的背景を踏まえ、現代との違いと共通点を押さえる。
- ・論争の書として。マルクス以降、既存の思想を批判する中で研究を深化させてきた系譜。
- ・実践の書として。単なる哲学や歴史学の研究ではない。研究者は同時に活動家だった。
- ・現代の諸問題に照らし合わせる。具体的に見てこそ、古典の意義が明らかになる。

### 2. プレハーノフが活躍した時代——19世紀ロシア

- ・ロシアは封建制が強く、資本主義化は上からの近代化という形で遅れて行われた。
- ・ロシアの資本家は弱く、ツァーリズムに対する妥協的な側面が強かった。18世紀フランスとの違い。帝政と資本家の対立は限定的で、封建的勢力が資本家を利用できた。封建性と資本主義との関係は時代によって異なり、癒着の形も国によって違ってくる。
- ・ロシアは十分に資本主義化できないという見地から、農村共同体をもとに社会主義を建設しようと考えたナロードニキ。アナーキズムの傾向が強い。
- ・プロレタリアートの増加に伴い、マルクス主義に立脚した運動が力を持つ。ナロードニキからマルクス主義者へ転身した人は多い。
- ・『歴史における個人の役割』はそれらとの論争・対立の中で書かれた。英雄史観への批判。個人の過大評価はテロをもたらす。

### 3. 通俗的なマルクス主義観への批判

- ・マルクス主義は「経済決定論」ではない。上部構造は土台に反作用する。
- ・宿命論でもない。個人を否定するわけでもない。

### 4. 弁証法

- ・マルクス主義は「西欧的な」「二項対立」を社会に応用したものではない。階級闘争が単純な二者間の対立だったことなど一度もない。
- ・矛盾の現実的な現われは複雑。重要なのは、その中から主要な矛盾をつかまえること。
- ・対立物の統一と揚棄。単なる併存でもなく折衷でもない。
- ・動的な過程として観察する。
- ・ある対象だけを取り出すのではなく、全体の関連の中で分析する（個人はまさにそう）。
- ・「深奥な定義は、表面的な定義を否定するのではなくて、それを補足しながら自身のなかに維持するのである」(pp.18-19)

・普遍と特殊。個別の中に一般性を見出すべきであって、「個体が一般者のなかに解消する」(p.78)のは誤り。それだと宿命論になる。

## 5. 唯物論

- ・主観主義の批判——行動で失敗をもたらす。
  - ・客観的实在に主観的認識を合わせるという考え方。
  - ・我々の意識も、根本的には経済という基礎によって決まる。存在が意識を規定する。
  - ・即自的・無自覚的な場合でも規定される。対自的・自覚的には規定する法則を利用する。
- 「自由とは必然性の自覚である」(p.16)

## 6. 歴史の見方

- ・生産力の発展が生産関係の枠を超えると、それに応じて上部構造が変化(革命)し、経済という土台をも変革する。
- ・歴史の進歩は一直線ではない。同時に、ナポレオンの帝政は旧体制への逆戻りではない。
- ・個人が支配を行うには階級的基盤が必要である。
- ・ブルボン家の王はブルジョアジーと貴族の対立の上に封建主義を全国的規模で再編成し、両方の上に立ちつつも封建的貴族を支持基盤とした。封建的土地所有が必要。
- ・ナポレオンは大ブルジョアジーや土地を得て保守化した農民を基盤に、旧貴族層の一部と妥協し、徒党を新貴族化して支持基盤とした。資本主義的所有に基づく市場の拡大という要請。
- ・ドイツの場合ブルジョアジーが弱体で、封建的支配層がブルジョアとプロレタリアートの対立の上に乗れ、両者を支配する体制が長く続いた。支配層の自己刷新として資本主義的改革を行う。ブルジョアの利潤から土地所有を通じて利益を得ることもできる。

## 7. 現代の諸問題によせて

- ・戦国武将の軍事統帥と資本家の経営は根本的に違う。
- ・運動の現場では適切なリーダーシップを執ることが求められる。
- ・「新左翼」の危険な行動はマルクス主義から来るのではない。主観的な誤りがもたらす。

## 8. これからの読書会をどう進めるか(提案)

- ・毎回この本だけを読む必要は必ずしもないと思われる。現代的な論点を検証していく形が良いのではないか。「論点整理」を使う。
- ・大学の教養課程で学ぶ政治学と対比しながら読むのも面白いかも。
- ・成蹊大学や法政大学など(もちろんここ東大も)の現場で起きている事件を読み解くことを念頭に置いて研究する。